群教セ	H01 － 01
	令2.275集
	幼児教育

学年間の接続を意識した３歳児保育において、安心感をもって自己発揮する幼児を育てる

――幼児のよさや可能性の見取りと それを生かす環境の構成を通して――

特別研修員　村上　由紀恵

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

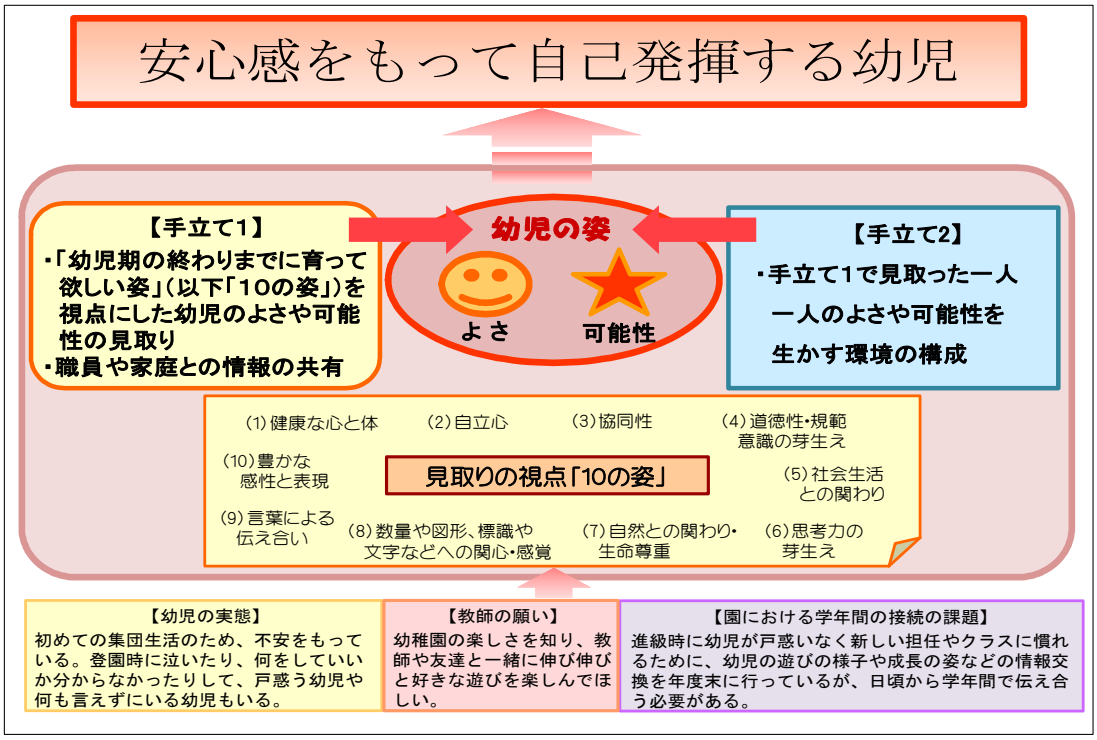
幼稚園教育要領解説には、「小学校の教師と『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手掛かりに子供の姿を共有するなど、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図ることが大切である」と小学校教育との接続の重要性が述べられている。また、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は５歳児に突然見られるようになるものではないため、５歳児だけでなく、３歳児、４歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意する必要がある」と記されていることからも、学年間の接続も同じように重要であると考える。

研究協力園の接続を考えると、学年間の接続については進級時に幼児がスムーズに新しい担任やクラスに慣れるために、幼児の遊びの様子や成長の姿などの情報交換を年度末に行っているが、紙面での引継ぎが中心である。幼児一人一人について共通理解をするためには、年度の切り替え時だけでなく、日頃から学年間で伝え合っていくことが必要である。

そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「10の姿」）を視点に幼児のよさや可能性を見取り、職員や家庭と情報を共有し、見取ったことを生かす環境の構成を行い保育していくことで、安心感をもって自己発揮する幼児の姿につながると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　保育改善に向けた手立て

３歳児が安心感をもって自己発揮できるようにするために、以下の手立てを行う。

手立て１　「10の姿」を視点にした、幼児のよさや可能性の見取りと職員や家庭との情報の共有 **手立て２**　手立て１で見取った一人一人のよさや可能性を生かす環境の構成

手立て１の「10の姿」は、幼稚園教育要領解説には「到達すべき目標ではないこと」「５歳児に突然見られるようになるものではないため、５歳児だけでなく、３歳児、４歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくこと」と記されている。

本研究では、幼児のこれから伸びていくであろうと思われる事柄を可能性と捉え、「10の姿」を視点に幼児のよさや可能性を見取り、職員間で共有した上で保育を展開し、次学年へと引き継いでいくことが学びの連続性を保障することになると考える。３歳児においては、家庭保育から初めての集団保育になる幼児が大半を占める中で、入園時にそれぞれの育ってきた環境を知るために家庭との連携も大事になると考える。

そして、手立て２で、手立て１で見取った一人一人のよさや可能性を生かす環境の構成を行うことで、３歳児が安心感をもって自己発揮するようになると考える。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　「10の姿」を念頭に置きながら、幼児一人一人のよさと可能性の見取りをしたことで、幼児の内面を多面的に捉えることができた。

○　幼児の内面を多面的に捉え、幼児理解に努めたことで、不安や戸惑いがあった幼児のありのままを受け止め、一人一人の発達に合った援助を行うことができた。その結果、幼児は自分の思いを出せるようになり、好きな遊びに自ら関わって遊ぶ姿が多く見られるようになった。

○　見取った幼児の姿を職員間で共有したことで、担任以外の職員も幼児の育ちに合った必要な援助を行うことができ、幼児が安心して遊ぶ姿につながった。

○　園や家庭での幼児の様子を互いに伝え合う機会を多くつくったことで、幼児が育っている姿を園と家庭で共有でき、保護者との信頼関係につながった。保護者は子育てに関する不安や心配が軽減して、大らかに受け止め、幼児に接するようになった。また、教師は、園では見られない幼児の姿を知ることができ、幼児の見取りや援助の方法のヒントになった。

○　教師が、幼児を「～しない」「～できない」と表面的に判断せず、今後、育っていくであろう可能性と捉えたことで、教師にも気持ちの余裕ができ、じっくり幼児に関わることができた。そのため、幼児の思いは満たされ、少しずつ心を開き、安心感をもって自己発揮する姿につながった。

２　課題

○　今後は、全職員が幼児一人一人を「10の姿」を視点に多面的に見取ることが必要である。

○　職員が見取った幼児のよさや可能性やそれを生かす環境の構成について、カンファレンスする時間を計画的に位置付けていく必要がある。

実践例

１　研究に関連する実施当日のねらい及び内容

(1)　ねらい（３歳児・２学期）

○教師や友達と一緒に伸び伸びと体を動かして遊ぶようになる。

(2)　内容

・友達のすることを見たり、まねしたりしながら一緒に遊ぼうとする。
・友達や教師と体操やかけっこなどを通して体を動かすことを楽しむ。
・いろいろな遊具や用具に興味をもち、遊んでみようとする。

２　幼児教育要領上の位置付け及び環境の構成の視点

「幼稚園教育要領解説」には、５領域のねらい及び内容に基づいて、幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、幼児期の教育において育みたい資質・能力が育まれていくと記されている。そこで、本実践では、特に心身の健康に関する領域「健康」において幼児が上述の「(2)内容」を経験するように、次の環境の構成の視点をもって保育を展開することとした。

＜友達のすることを見たり、まねしたりしながら一緒に遊ぼうとするための環境の構成＞

・友達のしている遊びに教師も一緒に参加したり、楽しさを伝えりしながら興味や関心を向けられるようにする。また、複数人で同じ遊びが楽しめるように必要な遊具や用具の準備をしておく。

＜友達や教師と体操やかけっこなどを通して体を動かすことを楽しむための環境の構成＞

・事前に活動の内容を他学年の教師と確認し合い、年齢に合わせて無理なく活動が進められるように配慮する。
・異年齢児とも一緒に遊べるように、体操や遊戯の曲などを準備したり、必要な遊具や用具はすぐに出せるように近くに準備したりしておく。

＜いろいろな遊具や用具に興味をもち、遊んでみようとするための環境の構成＞

・雲梯やジャングルジム、土山等の固定遊具やいろいろな遊具を使った遊びに挑戦する姿を見守り、認め、励ましながら、必要に応じて教師も一緒に関わり、挑戦した喜びを共感できるようにする。

(1)　研究に関わる３歳児の教育課程

期	１期		２期		３期			４期		５期		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発達の過程	・園生活に慣れる時期 ・教師に親しみの気持ちをもち、安心して過ごす時期				・いろいろな遊びに興味をもち、教師や友達と遊びを楽しむ時期					・安心して過ごす中で、自分の思いを出して遊ぶ時期		
テーマに関係する幼児の姿	・園の生活を覚え、教師と一緒に好きな遊びを楽しみ、喜んで登園する。 ・友達の遊ぶ様子を見て、まねをして遊ぶ。				・教師や友達と一緒に、伸び伸びと体を動かして遊ぶ。 ・遊びの中で使いたい物を教師に要求したり、自分で見付けようとしたりする。					・自分の考えや思いを言葉や態度で友達と伝え合いながら遊び、互いの気持ちに気付く。		
研究に関係するねらい及び内容	○幼稚園や教師に親しみの気持ちをもち、安心して過ごすようになる。 ・教師や友達と一緒に好きな遊びをする。				○自分の好きな遊びや友達のしている遊びなど、いろいろな遊びに興味をもつようになる。 ・同じ物を作ったり作ってもらったり、まねたり、誘い合ったりし、同じ場で友達と関わって遊ぶ。					○自分の思ったことや感じたことを自分なりに表現するようになる。 ・友達に自分の思いや考えを伝えようとする。		

(2)　本実践につながる幼児の姿と考察

幼児の姿	考察
園のグラウンドで４、５歳児がかけっこをしていたので、３歳児全員で行ってその様子を参観した。４、５歳児は順番に並んで待ち、スタートラインに４人ずつ並んで走っていた。 M児は、これまで自分の番が終わっても何回も繰り返し走っていたが、４、５歳児の様子を見た後は、順番に並び、１番最初に走り、その後は、友達が走るのを見て待っていた。かけっこは、５歳児がゴールテープの係をして、４、５歳児がみんなで応援してくれた。運動会に近い雰囲気の中でかけっこを行った。	・「10の姿」(1)　４、５歳児の姿を見て、運動会の雰囲気を感じ取れたと考える。 ・「10の姿」(2)(3)　４、５歳児が楽しそうにかけっこしたり、自信をもって取り組んだりする姿を見て、「やったみたい」気持ちになった。 ・「10の姿」(4)　順番を待ったり、並んで走ったり、応援したりする様子が理解できたと考える。 ・「10の姿」(5)　担任以外の教師や４、５歳児の園児と同じ活動を経験することで育っていく。
親子遠足で自由に動物の餌やりや触れ合いをしているときに、K児はM児と一緒に行動していた。M児が乗馬をすることになり、それを見ていたK児は、「M児ちゃんなん	・「10の姿」(7)　牧場の自然やの動物に触れ合い、親しみの気持ちがもてた。 ・「10の姿」(2)　これまであまり自分の思いを出さず、おとなしかっ

か・・、ばか」と言い、保護者にくっついてM児が馬に乗る姿を見ていた。K児の保護者には、K児が本当の気持ちを言葉に出さないことを伝えておいたので、K児の気持ちを察した保護者は「乗りたいんだよね。乗れるの？」と聞いた。K児は「うん！」と大きく頷き、緊張した表情で一人で馬に乗った。教師は馬に乗っている様子を保護者と一緒に見ながらK児が一人で乗れたことを共に喜んだ。一周して到着すると「よかったね」と保護者は笑顔で迎え、K児は最後に馬を優しく撫でた。	たK児が、自分なりの言葉で馬に乗りたい気持ちを表した。 ・「10の姿」(1) K児は一人で馬に乗れたことから、やりたいことに向かって心と体を十分に働かせた。 ・「10の姿」(5)(9) K児の様子について、保護者と情報共有しておいたことで、K児の思いを満たすことができた。今後、自分の思いを言葉で表現できるようになれば、親しみをもって人と関われるようになると考える。
A児はビニール袋にキンモクセイをたくさん入れてオレンジ色の色水を作り、ずっと離さずに持って遊んでいた。A児が一緒に遊んでいたM児に色水を見せると、M児は「かわいいね」と言った。A児は「やったぁ」と飛び跳ねて喜んだ。A児はその後も色水を持って笑顔で、M児とかけっこをして遊んだ。	・「10の姿」(1) 自分のやりたい色水作りに取り組んでいる。 ・「10の姿」(7) 園庭にある秋の自然に興味を持っている。 ・「10の姿」(3)(9) 一緒に遊んでいたM児に「かわいいね」と認めてもらったことで、嬉しい気持ちを素直に表現できた。 ・「10の姿」(1)(3)(5) A児は、園庭で教師や友達と関わりながら遊んでいる。
D児が赤いスケーターを見付け乗り出そうとしたとき、B児も来て横からスケーターに乗り込んできた。教師が「D児ちゃんが乗るところだったみたいだよ」と伝えると、B児はD児にスケーターを渡した。D児が「ありがとう」と言うと、B児は「はい！」と答え、すぐにB児はテラスからベンチを運んできた。教師は「乗り場にするんだね」と言うと、B児はベンチに座ってD児の姿をにこやかに見ていた。	・「10の姿」(3) B児は共通の目的に向けて自ら考えて気持ちを切り替え譲ることができた。 ・「10の姿」(4)(6) 以前の経験からベンチを置いて乗り場を作った。 ・「10の姿」(2) ベンチを置くことをで自分の気持ちを切り替えて待とうとしている。 ・「10の姿」(9) 友達と言葉で気持ちを表現しやり取りしている。

３　本日の具体化した手立てについて

手立て１	・「10の姿」を視点によさや可能性を見取り、必要な情報を保護者から聞いたり、園での姿を伝えたりして、共有する。 ・保育終了後に職員間で情報を共有する。
手立て２	・手立て１で見取った一人一人のよさや可能性を生かす環境の構成に必要な遊具や用具、様々な素材を準備したり、場をつくったり、必要に応じて援助したりする。

４　保育の実際

(1)事例１　運動会に向けての活動　「かけっこ」

A児についてのこれまでの見取りと情報共有　　**幼児の（・様子　◎よさ　★可能性）　◆情報共有**

・A児は８、９月頃は登園を渋っていた。初めての活動は、泣いて不安がる。
◎登園した日は、クラスでは自分のやりたい遊びを見付けてよく遊ぶ。◎周りの様子や物事をよく見ている。
★登園を楽しみにして、朝は泣かずに来られるようになるとよい。
◆嫌がっても連れてきてくれると園ではよく遊ぶことを保護者に伝えた。
◆登園できたときは、園で遊んだ様子を降園時に伝えた。休んだときは電話を入れて家庭での様子を聞き、教師や友達が待っていることを伝えた。
・その後、泣かずに登園できるようになった。

幼児の姿と教師の関わり	幼児の（◎よさ　★可能性）　〇教師の意図
A児はかけっこでスタートラインに立ったが、教師が名前を呼んでも返事はなく、スタートの合図にも走らなかった。担任は側へ行って「一緒に走る？」と聞き、手をつないだが、A児は走ろうとしなかった。A児はスタートラインのところで、教師と一緒に黙って友達が走る様子を見ていた。A児は走り終わった友達と一緒に５歳児に手をつないでもらいベンチに行き、４歳児が走る姿を真剣な表情で見ていた。隣で友達が４歳児の返事に反応して笑っているのを嬉しそうにニコニコしながら見ていた。 図１　教師と一緒に見ている場面	◎「10の姿」(1) 体を動かす活動に参加し、走ろうとする気持ちはある。 ◎「10の姿」(2) 泣かずに友達とスタートラインに立てたことは、自立心の面で成長している。 〇A児のこれまでの姿から、無理に走らせない方がよいと判断し、A児の隣で一緒に走る様子を見た。 ★「10の姿」(9) 今後は、自分の気持ちを言葉にできるようになるとよい。 ◎「10の姿」(5) 運動会の雰囲気を感じ取っているのではないか。 ◎「10の姿」(1) クラスの友達と過ごす安心感はもっている。 ◎「10の姿」(2) 担任から離れても友達と一緒にいられた。 ◎「10の姿」(3) 言葉は発してなくても友達を通して感情体験をしている。 ◎「10の姿」(5) 運動会の雰囲気を楽しいと感じているのかもしれない。 ★「10の姿」(3) 今後、経験を重ねていけば、友達と一緒に走るだろう。

＜事後の幼児の姿＞
A児は、運動会の朝、保護者からなかなか離れられなかった。かけっこは走ろうとしなかったため、教師が抱っこして走った。終了後、教師が「A児ちゃん、運動会どうだった？」と聞くと「楽しかった！」と飛び跳ねながら言い、保護者に手を引かれニコニコ笑顔で帰って行った。また、その後は泣かずに登園し、保護者に「行ってきます」と自ら手を振れるようになった。

＜家庭との情報共有＞
後日、A児の保護者と運動会後の話をする中で、行動するかしないかではなく、その場にいて友達のしていることを見て、教師の話すことを聞いて、感じたことこそが、その幼児にとっての経験となるということを伝えた。

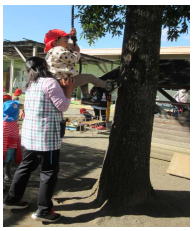
＜事後の職員間の情報共有＞
A児は走らなかったが帰りに「楽しかった！」と嬉しそうに帰っていった様子やA児の「楽しかった運動会」として心に残ったであろうことを保護者にも伝えたと職員に話した。A児がその後、園庭で遊んでいると、園長先生が「今日も元気に来られたね」と声を掛

けてくれたり、他学年の教師がA児に「何して遊んでいるの？」など、遊びの場面でA児と関わってくれた。

(2) 事例２　思い思いの遊び「ドングリを穫りたい」

B児についてのこれまでの見取りと情報共有　　**幼児の（・様子　◎よさ　★可能性）　◆情報共有**

・B児は初めての集団生活で、友達とどのように関わってよいのか分からないのか、言葉でうまく伝えられず、教師が間に入ってやり取りすることが多い。
◎好奇心旺盛で新しい遊びが始まると「僕もやりたい」と寄ってくる。
◎自然の変化の気付きや発見が早い。◎気持ちが優しい。
★友達と一緒に遊びたいことや気持ちを言葉で伝えることができるようになって、安心して遊んでほしい。
◆保護者には、B児が遊びの中で自然の変化に気が付いたことや興味を示して取り組む姿などを伝えつつ友達に思いがうまく伝えられないときに、教師が思いを聞いて伝えたことなどを話した。
◆入園前のB児の姿を知っている教師もいるので、遊びの中で他学年の教師が関わったときには、その時の様子を担任に話してもらったり、B児が他学年の遊びに興味を示して関わって行ったときには、一緒に遊べるように配慮してもらった。

幼児の姿と教師の関わり	幼児の（◎よさ　★可能性）　〇教師の意図
運動会に向けての活動後、園庭で、C児やD児がビールケースや鍋やお玉、自分たちで拾ったドングリなどを準備して料理作りを始めた。B児はそのドングリが欲しくなって黙って鍋から取った。料理をしていたC児が「だめ、やめて！」と叫んだ。 教師がB児に「C児ちゃんが大事に作っているから、ドングリ取らないでって言ってるよ」と伝えると、C児は「取らないで」と優しい口調でB児に言った。すると、B児は「ドングリ、どこにあるの？」とC児に聞いた。 教えてもらった木の下に行くと、皆が拾った後でドングリは落ちていなかった。B児は「あそこに登ったら穫れるかな」と言い、B児はロープにしがみつき、クヌギの木に登ろうとした。教師は下から支えて押した。B児は、長い時間、必死にしがみつき、何とか教師の頭の上まで登ったが、枝まで届かず、降りた。 教師は、B児が思った以上に高い所まで登ったことを共に喜び、B児に「高い所まで登れたね！」と伝えた。周りにはロープに登りたい幼児が数人列を作っていた。B児はしばらくすると、待ちきれずに「登りたい」と何度も言ってきた。  図２　ロープに登っている場面	◎「10の姿」(2) 自分から興味を示して関わっている。 ◎「10の姿」(7) 自然物に興味がある。 〇C児は怒っていたので、落ち着いて気持ちを伝えられるようになってほしいと考え、B児に向けてC児の気持ちを代弁した。 ◎「10の姿」(3)(9) ドングリがどこにあるのか、言葉で友達に聞くことができた。 ◎「10の姿」(6) ドングリを穫る方法を自分で考えた。 ◎「10の姿」(2) 自分で考えたことを試している。 ◎「10の姿」(1)(2) ドングリを穫るために、全身を使って諦めずに登っている。 〇挑戦する気持ちを受け止めて、一緒に関わり登れるように支えた。 〇手を離さずに高い所まで登れたことを認め、教師の嬉しい気持ちを伝えた。 ★「10の姿」(3) ロープに登りたい幼児が並んでいることに気付き、友達の気持ちが分かってくるだろう。 ★「10の姿」(4) 順番にするなど、今後、友達と関わる中で気付いていくだろう。 ◎「10の姿」(1) 自分のやりたい気持ちを表現している。 ◎「10の姿」(2) ドングリを手に入れるまで、諦めない気持ちがある。

＜事後の幼児の姿＞
次の日、料理作りをしていたB児はドングリのことを思い出し教師と一緒にクヌギの木の下に行った。一つ落ちているのを見付け、料理作りの所に置きに行き戻ってきた。B児は「もっと穫りたい」とロープに掴まり木を登り始めた。教師に手伝ってもらい、前日と同じくらい登った。やはり穫れず「残念だったね。どうしたら穫れるかね？」と教師は声を掛けた。一緒にいたE児が「長い棒でツンツンてすればいいんじゃない」と提案した。教師は身近にあった捕虫網を持ってきてドングリを落とした。教師が捕虫網を片付けてクヌギの木の方へ戻るとB児がニコニコした表情で歩きながら「ドングリが穫れて、嬉しかった～」とつぶやくのが聞こえた。

＜事後の職員間の情報共有＞
B児はロープを高く登って褒められても、達成感や満足感は得られなかったのではないか、と教師間で情報共有する中で気付いた。次の日もB児のドングリを穫りたい思いは続き、教師はドングリを穫れるように援助した。B児はドングリを手に入れられて満足することができたようだった。また、ロープに登りたい幼児が複数いることを補助教諭に伝えておくと、担任がその場から離れた後に「まだ、していない」と言うE児の声を聞いて補助教諭が支えて援助した。
また、他学年の教師から、B児は、集団生活を通して人との関わり方や言葉のやり取りなど様々な成長が見られてきているという意見が出された。

５　考察

事例１では、幼児の姿や成長などについて職員や保護者と共有したことで、A児は運動会を「楽しかった」と感じることができた。

事例２では、教師がB児の思いを受け止めて援助したことで、B児の思いが翌日まで継続し、結果的にドングリを穫ることができ、満足感につながった。補助教諭と情報を共有したことで、他の幼児の「やってみたい」という気持ちに合った援助をすることができた。

「10の姿」を視点にした幼児一人一人の内面の見取りがとても大事であり、その見取りを職員や家庭と共有していくことは欠かすことができないと感じた。家庭と情報共有をしたことも、保育終了後に職員間で伝え合うことで、全職員で共通理解することができると考える。その結果、幼児は、安心して自己発揮できるようになった。